広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第56号　2007　267－273

中島敦とラフカディオ・ハーンの作品比較

―『光と風と夢』と『佛領西印度の二年間』を中心に―

洪　瑟君

（2007年10月４日受理）

Comparison of Atsushi Nakajima and Lafcadio Hearn's Works
― Take '*the Light, the Wind, and the Dream*' and '*Two Years in the French West Indies*' as the core of exploration ―

Hung, Se-Chun

Abstract. In the past, researchers believed that Atsushi Nakajima's '*the Light, the Wind, and the Dream*' was created based on the associated materials of Robert Louis Stevenson's works, essays, critical biographies, letters, and so on. In this text, it reexamined the materials of '*the Light, the Wind, and the Dream*' by checking Atsushi Nakajima's inventory of books and his pocketbooks. From those information, we shall know Nakajima deepened his yearn for the South after his trip to Ogasawara Islands, and therefore started to read Lafcadio Hearn's '*Two Years in the French West Indies*' while he finished his trip to go back to Yokohama. While Nakajima wrote '*the Light, the Wind, and the Dream*', he obviously didn't only take the materials associated with Robert Louis Stevenson, but also introduced his own experience of Ogasawara Islands into his work. Moreover, through the comparison of '*the Light, the Wind, and the Dream*' and '*Two Years in the French West Indies*', we shall see that Nakajima learned the technique of portrait and the sensation to tropical islands from Lafcadio Hearn's '*Two Years in the French West Indies*', and therefore presented the technique in '*the Light, the Wind, and the Dream*'.

Key words: Atsushi Nakajima, Lafcadio Hearn, '*The Light, the Wind, and the Dream*', '*Two Years in the French West Indies*', 'The Travel Sketch in Ogasawara'
キーワード：中島敦，ラフカディオ・ハーン，『光と風と夢』，『佛領西印度の二年間』，「小笠原紀行」

一．はじめに

氷上英廣は「中島敦，人と文学」の中で，中島の書いた南洋のものについて，「ラフカディオ・ハーンの『仏領西インドの二年間』を読み，風物に対する感覚が中島敦に近いように思った。」[1]と書いている。氷上英廣は，中島の一高時代以来の親友であり，中島の作品を熟読玩味している。その点から考えると，彼の中島の作品に対する評価は看過できない。

氷上氏は，中島とハーンとの関係について，それ以上は論じていないが，実際に調べてみると，中島敦の蔵書目録[2]には，大正15年出版の『小泉八雲全集』（１～４，７，９～11，13，17，都合10巻，第一書房出版）があったため，中島は確かにハーンの作品を読んだことがあると言えよう。一方，父・中島田人が書いた中島敦年譜によると，中島は横浜高等女学校に勤めていた九年間，教鞭を取った傍ら，英文学と中国文学を研究していたそうである。その時期に中島がどのような英文学を研究していたのかは不明であるが，南洋作品群の一つ，「マリヤン」の中に，マリヤンの家に西洋文明を代表した『ロティの結婚』と『英詩選釈』を発見したという描写があり，ピエール・ロティの『ロティ

の結婚』と厨川白村の『英詩選釈』について言及されている。周知のように，ハーンはロティに深く影響された[3]。一方，厨川は文科大学でハーンに学び，ハーンへ敬慕の情を表していたことも事実である[4]。中島敦が自身の作品の中に，他の文学作品や作家を登場させる際，そこには表面上だけではなく，深い意味が込められていることが多い。それ故，「マリヤン」の中でその二冊の本に言及した意味は深いと考えられる。ハーンとの関連性も只の偶然ではないであろう。

これまでの中島敦の南洋物に関する研究には，ラフカディオ・ハーンとの関係を論じるものはない。ハーンは，1887年の夏にマルティニーク島に上陸し，二年間滞在した。その後，マルティニーク島での見聞・体験を『佛領西印度の二年間』と題して出版した。一方，中島敦は，熱帯島を背景とした作品，すなわち，『光と風と夢』，『南島譚』三篇と『環礁』六篇を書いた。中島の南洋物は，果たして，ハーンの影響を受けているのであろうか。本稿では，中島敦の『光と風と夢』を取り上げ，『佛領西印度二年間』[5]と比較し，『光と風と夢』における風物描写などがどのようにラフカディオ・ハーンの『佛領西印度二年間』に影響されたかについて考察したい。

二.『光と風と夢』の素材

中島敦は，遥かな異国に憧れている作家であり，彼の南方憧憬は既に早期の習作『蕨・竹・老人』の中に現れていると言われている[6]。中島が文壇にデビューした作品『光と風と夢』においても，彼の南方憧憬がよく現れている。周知のように，昭和十五年の夏から，中島はスティーヴンソンの関連資料を読み，昭和十六年，南洋へ出発する前に『光と風と夢』を完成させた。それ故，従来の研究では，『光と風と夢』は，中島がスティーヴンソンの諸作品，随筆，評伝，書簡などの関連資料を基にして創作した作品だと認識されている[7]。しかし，本稿では，『光と風と夢』がスティーヴンソンの関連資料に依拠しているだけでなく，中島の小笠原諸島での見聞やハーンの『佛領西印度の二年間』の影響も受けていると指摘したい。

1．中島敦の南洋初体験―「小笠原紀行」

昭和十一年三月，中島敦は南に発ち，小笠原諸島へ旅に出た。彼は23日に霊岸島から出帆し，八丈島，青ヶ島を経て，最後に小笠原諸島に到着し，約一週間の旅を体験した。そして，この旅での見聞を「小笠原紀行」と題して，数十首の和歌に詠んだ。「小笠原紀行」の他に，中島の手帳に記された小笠原諸島旅行に関するメモも残されている。小笠原に関する記録はそれほど多くはないが，それらの資料によって，その時の中島が既に熱帯風物と小笠原諸島の帰化人に興味を持っていることが窺える。

岩田一男は，『光と風と夢』と素材であるスティーヴンソンの『Vailima Letters』とを詳しく比較し，『光と風と夢』では，

> 頭上は，重なり合う巨木，巨木。其の葉の隙から時々白く，殆ど銀の斑点の如く光って見える空。地上にも所々倒れた巨木が道を拒んでいる。（「二」）
>
> （傍点岩田）

> 木を伝って横の堤に上る。青臭い草の匂がむんむんして，暑い。ミモザの花。羊歯類の触手。……又，水路に沿って行く。今度は水が多い。恐ろしく冷たく澄んだ水。夾竹桃，栴檀樹，たこの木，オレンジ。其等の樹々の円天井の下を……（「四」）
>
> （傍点岩田）

のような，効果を添えるために作者の想像によって付加された部分（傍点部分）があると述べている。また，これらの付加された部分から，中島文学の大きな特徴の一つとして，感覚的，特に視覚的であることが分かると指摘している[8]。このような景色に対する視覚的な描写は，一般的には中島の想像によって創作されたと言われているが，実際には，「小笠原紀行」において

> 日や出でし海の上の濛金緑にひかり烟らひ動かんとする[9]

> 肉厚き葉の上に白き粉をふけり龍舌蘭の巨き簇り[10]

などのように，色彩的な視覚描写が既に現れているのである。また，岩田氏が例として挙げた中島の想像によるミモザの花，羊歯類，夾竹桃，栴檀樹，たこの木，オレンジなどの植物は，実は，小笠原諸島の父島によく見られる一般的な熱帯植物である。熱帯植物の名称は「小笠原紀行」や中島の手帳には詳しく記録されていない。しかし，中島が父島にある物産館や農業試験所へ行き，種々の熱帯植物を見たのは事実であり[11]，岩田氏が指摘した中島の想像によって列挙された植物名も，実際に彼が小笠原で見た熱帯植物だと考えられる。

2．『佛領西印度の二年間』との関連性

小笠原諸島の旅行の体験は，中島の南方憧憬をより一層深化させたであろう。昭和十二年に書かれた中島

の歌稿「遍歴」に，「ある時はスティヴンソンが美しき夢に分け入り酔ひしれしこと」のように，スティーヴンソンの南洋生活に対する憧憬を現している歌がある。そして，昭和十五年の夏，中島はスティーヴンソンの関連資料を読み始め，『光と風と夢』の執筆を準備した。しかし，実際には，小笠原旅行の後，彼はスティーヴンソンの作品を読む前に，もう一人の作品に接触している。昭和十一年の手帳記録には「五月四日〔月〕，Hearn. 2, 4, 9, 11」[12]と記載されており，小笠原諸島から横浜に戻った中島が，その時にハーンの作品を読んでいたことが推測できる。中島の蔵書目録と対照すると，「Hearn. 2, 4, 9, 11」というのは，『小泉八雲全集』の第二巻『佛領西印度の二年間』，第四巻『東の國から，心』，第九巻『書簡Ⅰ』と第十一巻『書簡Ⅲ』のことだと分かる。

小笠原諸島での体験が，中島がハーンの作品を読み始めたきっかけであろう。『佛領西印度の二年間』は，ラフカディオ・ハーンが仏領西インドでの生活体験に基づいて書いた紀行散文集である。その中には，熱帯島の風物描写や島の人々の暮らしぶり，民話の再話，民俗，信仰，習慣，怪談，ハーン自身の身辺雑記，随想などが収められている。スケッチ作家としてのハーンは，『佛領西印度の二年間』において，熱帯島で見た風物を全て生き生きと描写している。そのため，熱帯に対する興味が湧いた中島は，小笠原諸島から横浜に戻ってから，程なく『佛領西印度の二年間』を読んだと思われる。

氷上英広が，「『光と風と夢』の中の主人公スティーヴンソンの眼にうつる風景などは，想像で書かれたものだが，中島が実際に南洋を見聞して書いた『環礁』の中の風景の描写とほとんど区別がつかないのは面白い」[13]と言うように，南洋へ行く前の中島が『光と風と夢』の中で，いかにも南洋で見聞したような風景を描いたのは不思議に思われる。しかし，小笠原諸島での体験を熱帯島に関する風景描写の啓蒙とし，またハーンの『佛領西印度の二年間』における風物描写を参考にすれば，中島が実際に南洋へ訪れていなくても想像を働かせて熱帯島の風物を描写することは不可能ではないであろう。

実際にこの二部の作品を分析してみると，『光と風と夢』の中には，確かにハーンの『佛領西印度の二年間』における風物描写と類似している部分が多く現れている。次に，熱帯風物に対する感覚，客観的な描写法，原始社会の超自然信仰について分析し，『光と風と夢』が『佛領西印度の二年間』に影響されたという根拠を論じる。

三．『光と風と夢』と『佛領西印度の二年間』との類似点

1．熱帯風物に対する感覚

ラフカディオ・ハーンの『佛領西印度の二年間』には，

> が然し，熱帯の森林が皷吹する畏懼の念は，北の国の樹木欝蒼たる無人地がこれまで惹起し得た神秘的恐怖心よりか，確に偉大である。殆ど超自然的と思はれるほどの色彩の鮮かさがあり――葉状體が造つて居る大海の茫漠さがあり，時たま在る隙間が，その測るべからざる深味を示して，菫色がかつた暗黒を呈するがあり――その無窮のざわつきを構成する千萬の不可思議な音がありして，――それ等が，殆ど人を恐怖させる一種の創造的な力があるのだ，と強ひても人に思はせる。
>
> （「熱帯への真夏旅」p.86，下線筆者）

> 熱帯の日中の畏ろしい平静には，林の沈黙，山の（夜にはきこえぬ流れ川の聲に破らるゝだけの）森嚴な無言には，驚く許りの光の輝きにすらも，妖怪的なそして気味の悪い或る物があり――無量無限の物の怪の如くに世界を壓して居るやうに思へる或る物がある。　（「魔女」pp.291-292，下線筆者）

のように，渺茫で静かな熱帯森林に対する畏怖を感じさせる表現がある。一方，中島敦の『光と風と夢』では，スティーヴンソンが一人で密林へ行く場面が下記のように描かれている。

> 静かだ。私の振る斧の音以外には何も聞えない。豪華な此の緑の世界の，何という寂しさ！白昼の大きな沈黙の，何という恐ろしさ！
>
> 突然遠くから或る鈍い物音と，続いて，短い・痛高い笑声とが聞えた。ゾッと悪寒が背を走った。はじめの物音は，何かの木魂でもあろうか？（後略）
>
> （p.177，下線筆者）

以上のような描写を比較すると，中島とハーンの森に対する描写が非常に類似していることが明白であろう。中島とハーンは，共に，熱帯森林の広さと静けさに注目していると同時に，森に対して畏怖感をも抱いている。「小笠原紀行」とその関連記録では，中島は熱帯の植物に言及したが，熱帯の森については描かなかった。『光と風と夢』における広大，神秘，且つ寂静な森林に対する感覚が想像によるものではなく，ハーンの描写からヒントを得たものだと考えられる。

風景に対する感覚のみならず，熱帯島の人・物に対しても，中島とハーンは共通した見解を持っている。ハーンの描写による熱帯島の住民は，皆「元気」で，「いい体格」を持ち，「力強い」印象を受ける。熱帯島の女は「野性的」な美を持っているため，ハーンは常に熱帯島の女の美を称賛している。一方，中島も熱帯島の人々を，常に「野蛮的」，「逞しい」などの形容詞で描写している。熱帯島の人々を「土人」と呼びながらも，土人に好意を持っている。また，中島は，「赤銅色」，「銅」，「浅黒」，「褐色」，「黒」など肌の色の違いにも注目している。中島にとって，肌の色は，熱帯島の人々を描写する時には欠かすことのできない要素である。中島の描写に対し，ハーンは，「その肉の色が，果實の色よりかもつと餘計なくらゐ，種々様々であり且つ驚くべきものである。（中略）バナナの色合があり，レモンの色調があり，蜜柑の色味があり，時にはマンゴが淡赤く熟しかかつて居る時のやうな，赤味が交じつて居るのもある。」（「熱帯への真夏旅」pp.70-71）のように，仏領西インドにおける複雑な人種構成をさまざまな色によって分類し，生き生きと描写した。ハーンの熱帯島の人々に対する印象と肌の色で熱帯人を強調する点は，『光と風と夢』においても特徴の一つとして取り上げられよう。

実際には，「小笠原紀行」において，中島が小笠原諸島に住んでいる帰化人に興味を引かれたことは既に明らかである。「眼も髪も黒いけれど，混血児なることが明らかな帰化人少女」，「ロバァトと呼ばれる少年」など，その時の中島は既に人種の違いに着目している。小笠原諸島で形成された人種意識は，中島がハーンの『佛領西印度の二年間』を読んだ後，より一層深く構築されたと考えられる。中島がハーンの熱帯人に対する視点に影響され，熱帯人を描写する際に，ハーンの方法を踏襲した可能性が極めて高いと言えよう。

2．客観的な描写法

『光と風と夢』では，風景の描写に「名詞羅列」という特別な手法が使われている。他の作品にも風景描写は度々出てくるが，「名詞羅列」は，熱帯島の風景にしか用いられていない。特に，『光と風と夢』ではこの手法を明らかに多用していると言える。以下に，『光と風と夢』における「名詞羅列」で描写された部分をいくつか節録する。

> 攀上り，垂下り，絡みつき，輪索を作る蔦葛類の氾濫。総状に盛上る蘭類。毒々しい触手を伸ばした羊歯類。巨大な白星海芋。（p.177）
>
> ミモザの花。羊歯類の触手。（p.186）
>
> 恐ろしく冷たく澄んだ水。夾竹桃，枸櫞樹，たこの木，オレンジ。（p.186）
>
> 雨の音。海上遠く微かな稲妻。（p.187）
>
> 風の激しさ。水の冷たさ。艀の揺れ。海鳥の叫。（p.206）

「名詞羅列」のような描写手法によって，熱帯島の自然風景がスケッチのように自然に読み手の頭の中に浮かんでくる。熱帯島の自然風景を解説するように，作者の個人的な感情が排除され，熱帯の風物がそのまま客観的に読み手に伝わる。

風景の描写手法について，中島の各時期の作品における景色描写の部分を比較すると，その差異は明らかである。以下は，中島の早期の作品「虎狩」（昭和八年）と後期の作品「李陵」（昭和十七年）の風景描写の部分である。

> 時は次第に経つ。雪の白さで土地の上はかなり明るく見える。私達の眼の下は五十坪ほどの空地で，その周囲にはずっと疎らな林が続いている。葉の落ちていないのは，私達ののぼっている木と，その隣の松の外には余り見当らないようだ。その裸木の幹が白い地上に黒々と交錯して見える。時々大きな風が吹いてくると林は一時に鳴りざわめき，やがて風が去るにつれて，その音も海の遠鳴のように次第にかすかになって，寒い空の何処かへ消えて行ってしまう。松の枝と葉の間から見上げる星の光は私達を威しつけるように鋭い。（「虎狩」p.61）
>
> 秋とはいっても北地のこととて，苜蓿も枯れ，楡やの葉ももはや落ちつくしている。木の葉どころか，木そのものさえ（宿営地の近傍を除いては），容易に見つからないほどの，ただ砂と岩と磧と，水のない河床との荒涼たる風景であった。極目人煙を見ず，まれに訪れるものとては曠野に水を求める羚羊ぐらいのものである。突兀と秋空を劃る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても，しかし，将卒一同誰一人として甘い懐郷の情などに唆られるものはない。（「李陵」p.503）

「虎狩」では，雪が降っている寒い夜の物寂しさと寂静を長々と描き，狩人が虎を待っている時の緊張感を作り上げている。「李陵」における長い句によって描

かれた漠北の景色描写には，荒れはてて物寂しい，孤独な雰囲気が溢れている。つまり，中島がそれらの作品で表現したいのは，ただの景色描写だけではない。その後の物語の発展に応じ，読み手の共感を喚起するために，中島が意図的に感情的な要素をその景色描写の中に注いでいるのである。

他方，『光と風と夢』では，作品における語り手，つまり中島は，熱帯の風景を説く際に，ことさらに「名詞羅列」の描写手法を多用している。景色描写になるべく自身の感情を込めず，客観的な視点で熱帯の原始様態を読み手に伝えようとする意図が窺える。

この写生のような景色の描き方は，ハーンの作品にも見られる。

> 燃えるやうな青い空の下の，温かい黄色な狭い街路。――日光と黄色な塗料とを浴びて居る，多少古雅な，低い小綺麗な家と田舎家との，長い通景，――それから日蔭樹の並木路，――それから波打つて居る芭蕉の葉と棕櫚の葉とが其上に抽んでて居る低い庭壁，――といつた，ごちやごちやした印象。
>
> （「熱帯への真夏旅」p.128）

> 低い田舎風な家々と，小さな熱帯庭園とがあるだけである。（「熱帯への真夏旅」p.144）

> 円錐形のもの，頂の尖つた嶺，一端を截り斷つたやうな奇怪な恰好の山，があばれて居るのである。
>
> （「熱帯への真夏旅」pp.145-146）

> それから，菫色の天鵞絨な夕暮れの遠距離。――空すべてが，溶けた太陽の蒸気に充ちて居るやう思はれる時，燃ゆる橙黄色を背に，棕櫚のゆすぶれ！…
>
> （「リ」p.670）

> それから濛乎たるセント　ジョンの幻。――それからトルトラの灰色の精霊，――それから，もつと遠くに，もつと仄かに，なほもつと凄い程かすかに，ヴージン　ゴルダの金色の幻。（「リ」p.679）

> 何も無い空と日の光の無い海と。盲目な灰色な海に圓うなつて居る，色の無い水平線がある，北國の薄暗い天。（「リ」p.681）

このような景色の描写法は，『佛領西印度の二年間』に散見される。周知のように，『佛領西印度の二年間』を書くことによって，ハーンはスケッチ作家としての自己の適性を見出したと言われている[14]。『佛領西印度の二年間』において，ハーンはスケッチ作家として，なるべく客観的に見たままの風景を描いた。作品の量から考えると，「名詞羅列」の描写手法は，『光と風と夢』ほど多く使われていない。しかし，全体的には，両者が景色を描写する際の観点と手法は共通していると言える。

一方，中島は「カメレオン日記」では，主人公である「私」による熱帯風景の言及を次のような描写で現している。

> 久しく私の中に眠つてゐたエグゾティスムが，この珍奇な小動物の思ひがけない出現と共に，再び目覺めて來た。曾て小笠原に遊んだ時の海の色。熱帶樹の厚い葉の艶。油ぎつた眩しい空。原色的な鮮麗な色彩と，燃上る光と熱。珍奇な異國的なものへの若々しい感興が急に溌剌と動き出した。外はみぞれもよひの空だといふのに，私は久しぶりで胸の膨れる思ひであつた。
>
> （「カメレオン日記」p.75）（傍点中島・下線筆者）

『中島敦全集』第一巻の解題によると，「カメレオン日記」の執筆年月は，現存原稿末尾の欄外に記されている「昭和十一年十二月［二十六］」であり，脱稿した時期は，昭和十四年中であると推測できる[15]。時期的に考えると，「カメレオン日記」は，ちょうど中島が小笠原群島での体験を身に付け，ハーンの作品を読んだ後に書き始めた作品である。「自己存在の不確かさ」を主題として書かれた作品のため，風景描写はそれ程多くないが，他の時期に書かれた作品と相当な相違が見られる。『光と風と夢』における熱帯風物の描写と同様に，「カメレオン日記」においても「名詞羅列」の手法によって熱帯風景を描いている。ハーンに学んだ「名詞羅列」の方法で熱帯風景を描写する手法は，既に「カメレオン日記」に現れており，『光と風と夢』ではより多く使われていると考えられる。

3．原始社会の超自然信仰

1887年の夏，ラフカディオ・ハーンは，マルティニークに上陸した。当時の仏領西インドは未開の原始社会である。白人によってキリスト教の信仰が伝われてきたが，妖術や幽霊や不可知の力など超自然的な領域が熱帯島の人々に恐怖を感じさせる現状は少しも変わらなかった。マルティニーク島の民謡，物語，民間伝説の中に幽霊や物の怪などが多く出てきたため，ハーンはマルティニーク島を幽霊の国と称した。ハーンはこの超自然の信仰に大変興味を持ち，『佛領西印度の二年間』の中にも数多く描写した。「歸り来る者」の中

では，死んだラバ教父が提灯を持ちながら山を登るという恐ろしい話が描かれ，当地の親が「ラバ教父に連れて行ってもらう」という嚇し文句で子供を恐れさせる描写がある。「魔女」の中では，労働者の男を誘惑した綺麗な女が魔女になって男を殺した民間伝説を述べている。「自分の下女」においても，女中のシリリアが抱いている堅い「ゾンビ信仰」について描写している。シリリアのゾンビ信仰のように，仏領西インド諸島の人々に対して，このような「超自然」に対する信仰は，彼らの内的生活の一部であり，「遺傳的な或る物であり，人種的な或る物」[16]であると言われていた。文明人に対しては理解し難い超自然信仰が，熱帯島の原始社会には深く根付いていたことがハーンの描写から窺える。

一方，中島は『光と風と夢』の中で，六呎四吋位の大きな巨漢が幽霊をひどく怖がっていることを描いている。豚を盗んだ犯人を尋問した際，魔物が夜に豚を盗んだ犯人を捕まえることを聞いた後，巨漢は益々不安な面持ちになったという描写もある。そのような描写から，土人が超自然的な力を固く信じ，極めて恐れている心理が窺える。また，死んだ父の魂が鶴や猫に化して墓の前に佇んでいた描写，戦場で回っている昆虫を戦争の中で犠牲した親族の魂と見做して家に持帰って祀る描写などを通し，土人の「超自然」に対する信仰も現れている。

それらの描写の一部分は，中島がスティーヴンソンの関連資料から得た素材であるが，その中にサモアの風俗ではなく，中島が書き加えた部分もある。岩田氏は，熱帯島の「土人が父の墓に見た鶴や猫の幻影はカフカを好きだった中島君の創作」[17]だと指摘したが，カフカの『変身』から受けた人間が動物に変身するという発想より，むしろ中島はハーンの『佛領西印度の二年間』を参考し，ハーンに文明人として熱帯島における不可解・不思議な超自然信仰に着目する傾向を学び，そして，ハーンから創作の発想を得たとも言えよう。

四. 結　び

以上，本稿では，中島の蔵書目録と手帳の記録より，『光と風と夢』の素材となるものを新たに検討した。中島が小笠原諸島の旅行の体験によって南方憧憬をより一層深化し，その体験がきっかけとなり，ラフカディオ・ハーンの『佛領西印度の二年間』を読んだ。彼は，『光と風と夢』を執筆する際に，スディヴンスンの関連資料だけを依拠したのではなく，自身の小笠原諸島での見聞も作品に導入した。また，中島は小笠原諸島から横浜に戻った後に読んだ『佛領西印度の二年間』により，ハーンの熱帯風物に対する感覚を学び，その描写手法，民俗信仰を観察する視線などを作品の中に取り入れた。

『光と風と夢』は中島敦が文壇にデビューした作品である。その作品では，中島がスディヴンスンを通し，自身の南方憧憬を強く表しながら，南洋の視点から西洋文明に対して多くのことを説いた。一方，日本に帰化したラフカディオ・ハーンが脱西洋の代表作家と称され，彼の作品にも常に西洋文明に対する批判が表されている。今後は中島とハーンが西洋文明に対する視点を考察し，中島の西洋文明観がハーンに影響されたか否かについて研究し続けていきたい。

【注】

1）中村光夫・氷上英広・郡司勝義編集『中島敦研究』，筑摩書房，平成元年，p.221。

2）田鍋幸信「中島敦　蔵書目録」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　梶井基次郎・中島敦』有精堂，昭和53年）p.279。

3）平川祐弘氏は「ハーンがロティの方法と呼んだものは実はそっくりそのままハーンその人の方法でもあった」と指摘し，ハーンがロティに深く影響を受けたと主張した。（平川祐弘編『小泉八雲　回想と研究』，講談社文庫，1992年，p.189）

4）平川祐弘監修『小泉八雲事典』恒文社，2000年，p.188。

5）氷上英廣が「中島敦，人と文学」に指摘した『仏領西インドの二年間』は平井呈一訳の版本であるが，ここで用いるテキストは中島敦の蔵書目録に記されている『小泉八雲全集』第二巻の『佛領西印度の二年間』（大谷正信訳，第一書房出版，昭和２年刊行）である。

6）陳愛華「南島憧憬の行方－中島敦におけるアンチ〈近代〉の思考－」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第53号，2004）p.282。

7）岩田一男「『光と風と夢』について」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　梶井基次郎・中島敦』有精堂，昭和53年，pp.226-234），岩田一男「『光と風と夢』と Vailima Letters」（中村光夫・氷上英広・郡司勝義編集『中島敦研究』，筑摩書房，平成元年，pp.90-103），渡邊ルリ「『光と風と夢』試論」（『叙説』15，奈良女子大学文学部国語国文学研究室，昭和63年，pp.74-118），日南田一男「ヘンリー・アダムズとR・L・スティヴンスンと中島敦と――サモアでのある出会いをめぐって〔その一〕」（『武蔵大学人文学会雑誌』14，1982年，pp.9-51）。

8）岩田一男「『光と風と夢』と Vailima Letters」（中村光夫・氷上英広・郡司勝義編集『中島敦研究』，筑摩書房，平成元年），p.92。
9）『中島敦全集』第二巻（筑摩書房，昭和54年）p.298。
10）同注９，p.299。
11）中島敦昭和十一年の手帳による（『中島敦全集』第三巻，筑摩書房，昭和54年，p.458）。
12）『中島敦全集』第三巻，筑摩書房，昭和54年，p.456。
13）同注１，p.214。
14）太田雄三著『ラフカディオ・ハーン――実像と虚像』岩波書店，1994年５月，p.66。
15）『中島敦全集』第一巻　解題，筑摩書房，昭和51年，pp.560-561。
16）小泉八雲著・大谷正信訳『佛領西印度の二年間』第一書房，昭和２年，p.594。
17）岩田一男「『光と風と夢』について」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　梶井基次郎・中島敦』有精堂，昭和53年）p.231。

【テキスト】

中島敦著『中島敦全集』（筑摩書房，昭和51年）
小泉八雲著・大谷正信訳『小泉八雲全集』第二巻　佛領西印度の二年間（第一書房，昭和２年）

【参考文献】

日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　梶井基次郎・中島敦』有精堂，昭和53年
日南田一男「ヘンリー・アダムズとＲ・Ｌ・スティヴンスンと中島敦と――サモアでのある出会いをめぐって〔その一〕」（『武蔵大学人文学会雑誌』14，1982年，pp.9-51）
中村光夫・氷上英広・郡司勝義編集『中島敦研究』，筑摩書房，平成元年
平川祐弘編『小泉八雲　回想と研究』，講談社文庫，1992年
太田雄三著『ラフカディオ・ハーン――実像と虚像』岩波書店，1994年
平川祐弘監修『小泉八雲事典』恒文社，2000年
陳　愛華「南島憧憬の行方－中島敦におけるアンチ〈近代〉の思考－」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第53号，2004年，pp.281-290）

（主任指導教員　中村春作）